龍の御使い

おでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍の御使い

【Ｎコード】
Ｎ３８８７Ｚ

【作者名】
おでん

【あらすじ】
神に飛ばされた先は異世界の龍の巣。え！？番いになれ？
龍の血と加護を得た主人公は龍神信仰の布教の旅に出る。
初執筆初投稿
考えすぎると投稿できなくなりそうなので、推敲はしても重ねない予定です。なので乱文乱筆誤字脱字不条理ご勘弁。
書いてるうちにあらすじと変わる可能性あり。

第一章　神と龍とサラリーマン　その一

龍の御使い

第一章　神と龍とサラリーマン

その一

服部東司（はっとり　とうじ）は陶器製の小物を作る工場に勤めるデザイナーだ。と言えばいかにもかっこよく聞こえるが、その実はチーフデザイナーでもある若社長（二代目）のアシスタント・・・いや更に厳密に事実を言えば、

デザイナー5・雑用2・工場との折衝役2・出荷作業1

と言ったところであり、更に更に詳細に言えばデザインの仕事といっても若社長の作ったデザインを工場のライン向けに最適化する作業が半分を占めており、自分の職種を人に説明するとき「デザイナーです！」と言い切るのに躊躇してしまい「デザイナー・・・とか色々やってます・・・」とつい言ってしまうような立場かつ性格だった。東司自身も、もう少しデザイナーらしい仕事がしたいとは思っていたが、小さい会社故にデザインに専念出来ないのがしょうがない事で有る事も理解していたし、現代日本では斜陽の陶器産業においてデザイン力と企画力で売り上げを持ち直していっている若社長の事は年下とは言え尊敬していた。だから若社長からの飲みの誘いも、（はぁ今日の飲みは愚痴だろうなぁ・・・）と推測は付いていたが断らず付き合っていたのだった。

「いや～！　本当に伊那商会はなめてるよ！　おかげで俺の苦労も服部さんの苦労も全部無駄だよ！・・・おねーさんお湯割りお代わり～！」

若社長が生中を二杯空け更に焼酎の二杯目を頼みつつ愚痴る。

「かなり無理矢理納期ねじ込まれましたしね・・・まぁ俺の苦労はいいんすけど、社長がその仕様じゃ安定しないってあれだけ熱弁したにも関わらずですからね」
俺は三杯目の生中をちびちび飲みながら相づちを打った。
「そうなんだよー。時間が無いからって簡易発注で進めちゃった俺が悪いっちゃ悪いんだけど、あいつら　”多少質が安定しなくてもそちらのせいにはしませんから！”とか言っといて、問題が起きたら担当は来ずに上司が出てきて　”君の会社は問題がある製品を納める会社なのかね？”とか　”担当は安定しないなんて話は聞いていないと言っている”
だぜ！？一瞬あの熱弁は俺の妄想だったのか！？と自分を疑ったよ！ポレナレフだよ！」
「まぁ相手は大会社ですし、間接的とはいえうちにも定期的に仕事が来ている以上そこまであからさまにすっとぼけられると何とも成らんのが腹立ちますよねぇ・・・あっ、ちなみにポ　ル　ナレフです社長」
「レでもルでもポロナレフでもオーケー、考えるな感じろ！通じたんだから正解！」
「まぁ確かに意味は完璧に伝わりましたけどね・・・しかし何かしらの手で仕返しできないもんすかねぇ正直釈然としませんよね」
「んー・・・」
若社長がどて煮（モツの味噌煮・中京のソウルフード）を頬張り咀嚼しつつ目を閉じ考え込むのを見て、俺も焼き鳥に七味を振りかけて食べる。
（塩が濃いな・・・七味はやめとけば良かったかな・・・昔は塩辛い位の方がうまいと思ってたけど最近少しずつ苦手になってきたな・・・）とか考えていると、
「もうちょっと粘ってどうにか条件引き出すくらいしかいい手はないなぁ・・・むかつくなぁ・・・」
苦い顔をして若社長が呟く。

「いっそ俺が心労で倒れた事にしてしばらく旅行にでも行ってくるから、その間に服部さんがそれをネタに交渉するとかやってみる？」

と社長がいたずらっ子のような笑い顔でこっちを見るので、こちらも演技がかった感じで手を横に軽く広げて首を振りつつ応える。

「いやいや社長・・・社長がいないと会社が回りませんから。心を鬼にしてここは私が行きましょう！・・・経費で！」

「・・・じゃ病名は淋病ね！社内にも広めとくから！」

「いや・・・それは勘弁してくださいよ」

と二人で笑い合った時だった。

まさか笑い話の冗談が十倍増しで現実になるとは思わなかったよ。

２０１１年１１月２５日（金）　２１時２５分

享年３２歳

死亡原因：急性心筋梗塞

それが服部東司がこの世界に残した最後の記録だった。

第一章　神と龍とサラリーマン　その二

第一章　神と龍とサラリーマン
その二

思考はハッキリしている。いや、多分ハッキリしてるんだと思う。だといいな。

この状態は何だろう？　寝てるのか？　起きてるのか？　なんだかハッキリしません。

まず体が動かない。体の状態としては寝てるんだと思われます。体の裏側に何となく接地感がありますから。とはいえその感覚は非常に薄い物で、その上、体は動かないときたもんです。金縛りだろうか？どきどき。つーか俺今呼吸しているのか怪しいんですが。笑い事じゃないけど（笑）

体の感覚が非常に薄いので単に分からないだけかもしれないけどね。全身麻酔されているのだろうか？深く考えるとパニックになりそうな感じだし、思考は（多分）正常だから問題ないのだろうとその問いに対して眼をつぶる。

そんな訳で心の眼は一旦閉じたけど肉体的な眼はずっとつぶってます。てか、眼がおかしくなっているという可能性にも眼をつぶりたいです。先ほどから眼をつぶっているから見えないのか、眼を開けていても見えないのか、判断が出来ません。

そして聴覚これが今のところ一番頼りになりそう。と言うのも先ほどからなにやらぼそぼそと、しかし小さい音量の割には明瞭に声（音？）が聞こえますからね。

ん？なんで明瞭なのに声か音か分からないかって？

理由は簡単。あからさまに聞いた覚えのない感じなんですよ。数人で入り乱れて三倍速のスカッ〇トマン・ジョンを歌ってると言うのが、私の感想です。えぇ何が何だか・・・何となく声っぽい印象

はあるんですが、微妙なところです。
ちなみに味覚嗅覚はまったく感覚がないと来ました。まさに天舞宝輪。これだけ感覚が封じられてれば金色戦士にも劣らぬ力が手に入りそう。転職するか？鳳凰戦士。いやぁ一度は言ってみたいよね。”戦士に一度見た技は二度とは通用しない！”。いやぁ、とは言いつつ結構何度も同じ技食らってたよね彼。言うならばあれも一種のフラグなんだろうか・・・・。
いやそんな話はどうでも良い。今一番の問題は鳳凰戦士に転職するかどうかだ！
どうする！？ア○イフル！　あの犬可愛いよなぁ・・・所で犬や猫の可愛さって小さいからこそだと俺は思うんだ。確かにあの犬のつぶらな眼はもうたまらんですたい！なんだけど、もしあの犬が二メートルのサイズだったら、ぶっちゃけ怖いだろう。あの眼もつぶらな瞳というより表情の感じ取れない不気味な瞳になっちゃう気がするのさ。つまり何が言いたいのかというと身長１８０の俺も身長５０センチくらいなら可愛・・・・いくないか。不気味なだけか・・・なるほど俺にロリコンの素養が無い事が分かった。今風の言葉で言うなら、ロリコンさんがＹＥＳロリコン、ＮＯタッチだったから、俺はＮＯロリコン、ＹＥＳタッチだな。つまり俺はロリコンじゃないから触ってもおｋ。うへへ、夢が広がりまくりんぐ。ん？いえいえ、ほんと自分ロリコンじゃないっすから！自分真面目っすから！本気視と書いてマジメっすから！。見るだけっす、本気で見るだけっすから！ＹＥＳロリコン、ＮＯタッチですから！　つーか３２から見ると女子高生あたりでもロリコンだよね。

いやそろそろ話を本題に戻そう。

今俺が考えなくてはいけない事は鳳凰戦士に成るか否かの筈だ。
まず俺が鳳凰戦士に転職するには五感を封じる必要がある。
つまり触感が封じられていないと、俺は鳳凰戦士になれない。

鳳凰戦士になると、いやでもＮＯタッチ状態。
はい。転職しない事決定！
ふう・・・危ないところだった。もう少しで孔明の罠にはまるところだったぜ・・・さすが諸葛孔明。中国三千年の罠だったな・・・。

さて、と・・・・なんやかやと眼をそらしてみたけど、やっぱり五感が復活しねー・・・三倍速スカッ○トマン・ジョンは相変わらず聞いてると頭おかしくなりそうだし。

うがぁぁぁ・・・

いや待て落ち着け落ち着くんだ俺。まずはもう一度認識把握だ。
名前は服部東司三十二歳。
年齢は・・・だから３２だよ。
身長１８０ｍ　体重８０ｇ。
スリーサイズは上から８２・６２・７８位が遥か遠き理想郷。
株式会社○△陶器のデザイナー（筆者は○△□とか（株）○×△みたいな社名の会社をリアルで見た事あるけど、○△陶器は大丈夫だと良いなぁ・・・）
年収七百万。・・・程欲しい。現状だと中々貯金が貯まらないんだよなぁ・・・。
いやその話は取り敢えずどうでも良い。いや良くはないか、いや良い。良いっていってんだよ！虚しくなるからもう止めてください。お願いします・・・。

さてさて、えーと何だっけ？・・・　そうだ社長と飲んでたんだ。んで急に胸が痛くなって・・・やべー・・・俺ジョッキ倒した記憶があるわぁ・・・ガシャーンって音も記憶にあるから、割っちゃったなこれは・・・いや、それも良くはないけどほんとにどうでも良

い。

えーと・・・確か胸がどんどん苦しくなったんだ・・・それで倒れて・・・

げっ、俺本当にまずいのか!?・・・うわっどうなってんの!?

これ夢じゃないのか?

おっ? あれ? おぉっ!? なんだか目の前が明るくなってきた!?

龍歴２７０１２年
聖カイン歴８１５年１１月２５日　２１時２５分
神の右手により転生
転生後最初の言葉　「え?ドラゴン?・・・やっぱり夢か・・・」

それが服部東司が惑星クラチカに残した最初の記録だった。

第一章　神と龍とサラリーマン　その二（後書き）

１２月１５日改訂しました

第一章　神と龍とサラリーマン　その三

第一章　神と龍とサラリーマン
その三

朝のまどろみは、ふっわふわで蕩けるように甘い。
言うならば、蜜の川のせせらぎを大きな綿菓子に寝転がって流れのままにたゆたう様な物だ。手を伸ばし黄金の流れを掬い取り、指の間からさらさらと川に返す。
そんな美しき幻想の世界。
蝶よ花よ妖精よ。そんな存在しか許されない世界。
ならば人は何故この世界に永住しないのか。
それはきっと川を覗き込んだときに気づくからだ。自分という存在がこの世界における唯一にしてもっとも許せない異物で有る事に。
だが、例えこの身が異物であっても今はもう少しこの世界にお邪魔しよう。
今ならきっと許してもらえるはずだ。

なぜなら・・・

起きたくないんだよね。むにゃむにゃ。

東司は非常に寝起きが悪かった。少しでもまどろみを楽しむために会社まで自転車で5分、車で2分のアパートに引っ越したくらいの筋金入りだった。
しかしそんな睡眠におけるクライマックスでありハッピーエンドを邪魔する敵の魔の手が迫る。

「あ・な・た？　起きてください？　朝食の用意が出来ましたよ

？」

”敵の魔の手”を訂正。

むしろクライマックスがフルスロットルでハッピートゥルーエンドな模様。

うぉぉぉ素晴らしいぃぃぃ・・・

そう・・・思えば、今まであまり多くはないが付き合った事のある女性は

「ちょっとー、そろそろ起きてくれないと遅刻するんだけどー」

とか。

「ご飯は交互でって私言ったよね？」だったもんな。

いや、決してそれがおかしいとは思わないが、ほら・・・有るじゃないですか、男の夢っていうか、お約束っていうか。正直あざとい台詞だと分かっていても逆らいがたい本能を揺さぶられる一撃というか、ゆさゆさ揺らされた所をがばりんちょの朝から遅刻上等！YESモンキーマジックッッッみたいなさっ！

よーし、完全に目も覚めた事だし、如意棒もＲｅａｄｙだし、やってみるか！　ゆさゆさがばりんちょ！

「ぬぅ・・・いつもの事ながら中々起きんの・・・まぁ寝かせておくかのぅ」

え？・・・えぇぇぇぇ・・・せっかくスーパーがばりんちょタイムの予定だったのに！？

ショックだ・・・鬱だ寝よう・・・

「というかじゃ、起きとるじゃろ？　主様（ぬしさま）。それだけ鼻息が変わったらばればれじゃぞい。」

まぁそうだよね。

東司は「うい・・・おはよう、ゆらさん」と応えて体を起こした。

目の前には藍色の地に白色の花模様、薄い桜色の帯という着物を着た美しい女性が畳に膝を揃えて腰を下ろしている。

東司は布団に座ったまま頭を掻きながら、その女性を改めて眺める。
見た感じの年齢は２０代前半くらいだろう。身長は１７０ｃｍ程、黒髪は長く腰まであり非常に艶やかで、正に濡れ羽色と言われる物だろう。また顔は小さく非常に整っており、少なくとも日本人であれば、よっぽど特殊な嗜好の持ち主でない限りは美人、いや信じられないほどの美人と評するのは間違いない。
体つきは出るとこが出ており、以前は８２・６２・７８位が東司の理想だったが、それよりも少し胸は大きく腰は細いんじゃないかと思われる。とはいえ今となっては宗旨変えしているが。
ふっ・・・所詮、理想なんてより上質な理想が現れれば塗り代わってしまうものさ・・・
人が逃れられぬ、悲しきサガと言うやつだな・・・うむ仕方がない・・・

「おはようじゃ主様。
お食事にされますか？
お風呂にされますか？
そ・れ・と・も・・・・」

お？　おおぉぉ！？
朝やるテンプレではない気もするけど、
キタコレ！？
どっきどきのわっくわく！？

「トペ・コン・ヒーロ？」
「いや、その理屈はおかしい」

「むぅ？　なんでじゃ？・・・・主様の知識によると、朝起こしに来たおなごは「おっきろー！！」と言いつつ飛び乗る物じゃと思っ

たんじゃがのぅ・・・」

「絶対に俺の知識の中に前方一回転して飛び乗るおなごはいない！」

小首を傾げながら、「ふむ、そうじゃったかの？」なんて呟いている自分の奥さんを見ながら、自分の知識だから自業自得とはいえ、なんでこんな明らかに余分な知識まで身につけるかなと嘆息しつつ、知識を与えた時の事。つまり一年前この世界に召還された時の事を思い返すのだった。

第一章　神と龍とサラリーマン　その三（後書き）

１２月１７日改訂

第一章　神と龍とサラリーマン　その四

第一章　神と龍とサラリーマン
その四

起きたら目の前に全長３０センチ前後のちっこい東洋風の龍が浮かんでいた。

「え？ドラゴン？・・・やっぱり夢か・・・」

東司は寝起きが良いわけではないが、それは単にぐずぐずと微睡むのが好きなのであって、寝ぼけるタイプと言う訳ではない。
（まぁぶっちゃけ、起きれないタイプと言う奴であり、人はそれを駄目人間と言う）
なので「夢か」と言いつつも、思考自体は普通に回転し始めており、夢と言うにはあまりにもハッキリしすぎている事に戸惑う。

取り敢えず龍から眼を離し、周りを見渡してみる。
どうやら畳敷きの和室っぽい部屋で布団に寝ていたらしい。
和室っぽいというのは高い天井にシャンデリアがぶら下げられているからだ。
ここはどこのかぶれの家だと思わず苦笑した。

その時だった。
今まで全く動かなかった龍が突然動き始め、右腕に咬みついてきた。
「うわっ、いたっっ！！」
軽いパニック状態に陥りつつ、左腕を動かして龍を腕から払おうとするが、うまく振り払う事が出来ない。というか、龍が咬み付い

ている腕ごと動いて避ける為に触る事すら出来なかった。
三度目のチャレンジが失敗に終わり、普通に振り払うのは難しい、何か方法！？と思ったとき、唐突に腕から痛みが無くなった。龍が咬むのを止めたのだ。
龍は部屋の入り口の当たりまで、すいーっと離れていく。
それを横目に見ながら咬み付かれた場所を確認した。
二つの小さな浅い穴のような咬み痕。ただし穴が空いている割には僅かに血が滲んでいるだけだ。

毒！？　毒はあるのか！？　いや、蛇の毒は咬まれた直後から激痛があるって聞いたぞ？
夢？　やっぱり夢なのか？　いや？　痛かった。さっき確かに痛かったぞ？
夢なら痛くないとは限らない？　そうだほっぺただ。つねってみるか？
いや、咬まれた痛みの方がほっぺより上だろ。
より痛い事？　いや、痛いのは嫌だな。他になんか無いか？

と焦りつつ自分の思考に潜っていると、急に声を掛けられた。

「初めまして、服部東司様。」

咬み痕から目を上げると部屋の入り口に和服を着た女性が正座し、畳に指を突きながら頭を下げていた。
「え！？　あ、どうも！・・・えーと・・・初めまして？・・・・えーと・・・」
「私は名前をユーフラン・ライエン・ユラユラと申します。」

女性は顔を上げ微笑みつつ名乗る。
腰まで伸びる艶やかな黒髪。十二単ではないが艶やかな着物姿。

姫という言葉が自然と思い浮かんでくる。
「あ、どうもご丁寧に・・・えーと俺・・・じゃなくて、私は服部東司で、じゃない、と申します」
正直ちょっと狼狽える。さっきから展開が急すぎるし、夢なのか何なのか訳分からないし、女性はすんごい美人だし！！（ここ重要）
つーかすんごい美人だし！！（以下テンプレ）
一万ボルトだけど百万ボルトで、最後の天使がアリスな訳ですよ。
ハイスイマセン。自重しよう。
パニクってるな。なんだかテンションの浮き沈みが激しい。
落ち着け落ち着け・・・

「えーと、済みません。ユー・・・えーと」
「ユーフランとお呼びください。服部様」
「あ、はい。ユーフラン・・・さん。・・・これは夢・・・じゃなくて、えーと・・・ここはどこでしょうか？」
状況と展開が理解の範囲を超えており、何を聞いたら良いのかが浮かんで来ずに、ついつい”何を聞いたら良いでしょう？”と聞くところだった。やばいやばい。

「はい。服部様のご質問には全てお答えさせていただくつもりですが、まず最初に二つ謝罪させてください。」
「え？謝罪？・・・ですか？」
「はい。一つは、先ほど腕を咬んだ事をお詫び申し上げます。」
へ？噛んだ？・・・何の事だ？　そんなボーナスタイムあったっけ？
「先ほどの龍が私でございます。服部様とお話しさせていただくのに必要でしたので、血をいただく為に咬ませていただきました。」
サキホドノリュウ？？
・・・

先ほどの龍が私！？

え！えぇぇぇ！？

はぁ！？　何それ！？　ファンタジー！？

やっぱり夢か！？　夢なのか！？

「血をいただく事で言語と共にその他の知識も授かりました。この姿も服部様の知識を参考にさせていただいております。」

「あーー・・・おかしいと思ったんだよ。つーか、なんなんだろこの夢。きれーなおねーさんは分かるけど、龍が出てきて咬まれるとか、俺はフロイト先生に何を求めてるんだ？　自分がわかんねー・・・」

「服部様。混乱されるのは分かりますが、これは夢ではございません。」

ユーフランさんのまっすぐな目に魅入られ、一瞬にしてパニック状態が解除される。

それは彼女が人間ではないという事を告げているにも関わらず、その目は嘘をついていないと信じられる、信じさせられる目だった。

そして彼女の綺麗な唇から、決定的な壊滅的な事実が告げられる。

「ここは・・・異世界でございます。」

・・・

イセカイ？

・・・

伊勢かい？
なんちゃって

「うははははっ、うまい事言った！！　山田君座布団持ってきてー！」

あーはっはっは
パニック復活！
もう訳わかめ・・・。

第一章　神と龍とサラリーマン　その五

第一章　神と龍とサラリーマン
その五

その昔、知り合いが”踊る阿呆に、見る阿呆。同じ阿呆なら踊らにゃ損々”と言う有名な音頭に対し、どちらにも参加しなければアホじゃないと自慢げに言い放ちましてね。
それを聞いて、よしんばアホじゃなくても、ド阿呆って話かもしれんべと思った訳です。

ド阿呆はいかんよね、ド阿呆は。
人として、アホに為るのは良いけど、ド阿呆に成るのだけは避けないといけません。
なので、ド阿呆にならない為にも、

服部東司。踊ります！！

脳内が阿波踊り会場になり始めたその時、柔らかく温かい物に顔を包まれた。
いつの間にか目の前に来ていたユーフランさんの胸に優しく抱擁されていたのだ。
「どうぞ落ち着いてください。」
ユーフランさんは優しくそう言いながら、抱きしめたまま頭をゆっくりとなでてくれる。
彼女に頭を撫でられる度に少しずつ脳内の阿波踊り会場が撤去されていく。
残されたのは祭りの後の様なしじまと頭を撫でる優しい感触だけだ。

こうされていると、普段は忘れていた今は亡き両親の事を思い出す。
小さい頃、俺は母さんに膝枕して貰いながら頭を撫でられるのが大好きだった。それを見て親父が東司は小学生になっても甘えっ子だな。と笑ってたっけ。懐かしいな・・・
今は懐かしいだけで涙が出てこない程にはすれちまったけど、この心が暖かくなる感覚、いつまでも撫でて欲しいと思ってしまうのは小学校から変わらないな。男は基本マザコンだという説があるらしいけど、今だけは否定できん。やっぱり男はいつまでたってもママのおっぱいから離れられない生き物なのかもしれんわ。

・・・ん？・・・おっぱい？

・・・あるぅぇぇ？・・・この人ブラして無い事無い？　事無い事無い？

さて、なんか落ち着いたのは良いけど、今度は別の意味で落ち着かなくなりそうだ？
いやー、だってですよ、プッツンプリンしてたら、ほわわんプリンで、それがいつの間にかプリリンプリン。
何をいってるのか・・・（中略）・・・味わったぜ。
プリンだけにな（どや）
いかんいかん、別の意味で混乱しそう。
いや、ある意味既に混乱しているわけだが、まだ大丈夫。ぷっちんプリンで言えば、逆さまにはしたけど、まだぷっちんしていない状態？
何かの拍子にお皿に落ちてぷるるんぷるるんしたら、もう食べちゃうしかなくなっちゃうから早く元に戻さないと！
大体がだ。彼女は厚意でしてくれてるんだ。もっと紳士・・・じゃない（最近の紳士には変な意味も付加されてるしね）真摯な気持

ちで応じないといけません。
「ありがとうございます。もう大丈夫です。落ち着きました。」
御礼を言ってユーフランさんの精神攻撃から解放して貰う。残念無念。
彼女は少し心配そうな顔をしながら、少し離れた位置に座り直した。

というかさすがにそろそろね。
起きてる阿呆に、夢見る阿呆。同じアホなら馴染まにゃ損々。
粟は食っても泡食うな。
ってね。
そろそろ認めざるを得ないだろう。
これは夢じゃあない。こんな現実感のある夢はあり得ない。現実・・・なんだろう。
先ほどの彼女の言葉を思い出す。
異世界・・・ね。真実なのか担がれてるのか、どちらにしても、とにかく話を聞こう。
まぁ龍にしろ、この美人さんにしろ、これだけ手間掛けて俺を騙す意味は無いだろうから、本当に異世界なんだろうけどな。

「何でしたっけ？　あー・・・・咬んだ。とか言う話でしたね。血を飲む事で知識を得る。でしたっけ？」
「はい、テレパシーとか念話と呼ばれてる能力も使えるのですが、共通の言語が無い以上、概念のやりとりになってしまいますので。・・・俺・お前・頭・丸かじり・うまい、というやりとりになりますね。」
あどけない顔で説明してくれるユーフランさん。
つーか概念の説明に、何故それを選んだし・・・ちょっと怖いんですけど。
ギャップ萌えしている俺を置いて話が進んでいく。というか、俺

が進めていく。
「テレパシーが使えるんですか！？」
「はい。・・・とは言いましても、東司様の知識にある物とは少し違い、能力を使う側が一方的に伝える事が出来るだけで、東司様の心を読む事は出来ません。」
「あぁ・・・そうか、そう言えば龍？ですし、特殊な能力があっても不思議は無いのか」
ユーフランさんは一息ついて、正に”にっこり”という言葉がぴったりな笑顔で話を続ける。
「ですので、先ほど私が頭を撫でさせていただいた時も、何を考えておられたのかは分かりません。もっとも鼻を長くされてましたので、推測は付きますが。」

ギャー！！
ばれてーら！？　やっぱり紳士がまずかったのか！？
いや！？　落ち着け！　（どや）までは推測されない筈だ！
「いえいえ、紳士ですから、そんなとんでもない、おそらく混乱してたのでしょう。はははっ」
「ちなみに、血をいただいた時に東司様が知って見える知識の他に、東司様の趣味嗜好、細かに申し上げますと閨の趣味まで伝わりましたので、お隠しいただかなくても大丈夫ですよ。」

な　ん　だ　と　？

いやいやいやいや、やっぱり幻覚だ。
こんな綺麗な娘が女の子な訳がない。
ちがーーーう！！
こんな清楚な姫が閨の趣味とか言う訳がない！！　だ。
てーか、ゆるちて・・・
「あ、もし信じられないようでしたら、秘蔵の自慰用のお宝本の

内容ですとか、前の彼女さんに振られる原因になった、プレイの内容ですとか、お話しいたしますが。」
こちらは怒濤の如く押し寄せる衝撃に耐えるのに精一杯なのに、ユーフランさんは、更に矢継ぎ早に攻めてきます。助けて・・・
と言いますかですね。
「もしかして・・・それがユーフランさんの地ですか？」
ユーフランさんがにやっと笑う。
「まぁ、そうじゃな。厳密には違うのじゃが、これからはこれが地じゃ。だから儂に遠慮する必要はないからの。、畏まった物言いをせんで、普通に喋るがよいて。」
唐突にユーフランさんが砕けた口調になる。いや、くだけたっつーか、何なんだその口調は。
あれ？　え？　もしかして俺の知識から取った口調なの？
「ちなみに容姿は東司の好みにぴったりの筈じゃ。んでもって口調は東司殿が持っていた人型の龍神のイメージを流用しておるの。とはゆうても、何人ものイメージを持っておったので、はいぶりっどと言うやつじゃがの。」

・・・

正直オーバーキルと言う事なのか、幸か不幸かパニック状態には成らないけど、
えぇぇ、なにこれ・・・
言いたい事はいっぱいあるが、まずはこれだけは聞かない訳にはいかない。
「あんたがSっぽいのも俺の趣味なの？」
「ふむ。これは趣味というか東司の持っておる龍神のイメージによるところが大きいのかのう。とはいえじゃ、東司はお馬鹿なノリに付き合ってくれるタイプが趣味じゃから、そこは押さえておるよ」
あー確かに・・・

確かにそうなんだけど・・・
「後、東司の趣味に合わせて、夜はM気味じゃ」
おっきい胸を張ってどや顔するユーフランさん。
お願いですから性癖はばらさないで・・・
もうお腹いっぱいです・・・

両手を床に付き、うなだれる東司。
その姿は横から見るとユーフランに土下座しているように見えたとか。見えなかったとか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3887z/

龍の御使い

2011年12月19日02時54分発行